あるお

府中市郷土の森博物館だより al museo 2018 年 9 月 20 日

No.125



昭和7年(1932)、現在の宮町で撮影された釣瓶井戸

もくじ

- 1-2 水とともにくらしたむかし その 2…井戸水をつかう
 - 3 最近の発掘調査凸字形の竪穴建物跡を国府八幡宮の北東で発見
- 4-5 NOTE天霧る星ぞ 浮き沈むー古典における星空の発見ー
 - 6 府中の身近な昆虫絵巻 ②秋の水辺に竜の目玉
 - 7 展示会案内 企画展 <u>ちょっとむかしのくらし~その3~</u>
 - 8 史料に見る府中の事件簿 ②蚕日待で狐付き

水とともにくらしたむかし

人びとは日常生活をはじめとし、さまざまな形で水と関わり合ってきました。このコーナーでは、「水」をキーワードに、昭和30年代以前の府中のくらしを4回シリーズで紹介します。

その 2…井戸水をつかう

井戸枠の上に釣瓶と呼ばれる桶が乗り、釣瓶は縄につながれ、縄は上部の滑車にかけられています。縄の反対側にも同じ大きさの釣瓶がとりつけられ、いずれかの釣瓶を井戸におろして水を汲みあげる仕組み。昭和29年(1954)に市域に水道が通じるまでは、この釣瓶井戸が飲み水など、生活用水確保の基盤でした。

水とともに くらしたむかし



その2…井戸水をつかう

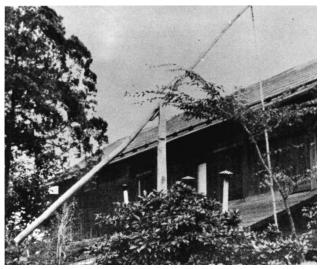
人びとが安心して暮らしていくには、水を確保する必要があります。府中では川の水や雨水も利用しましたが、飲み水には湧き水か、井戸を掘って汲みあげた地下水を用いていました。その水は地中の石や土によって濾過されているので、飲むのに適していたのです。市全域に水道が通じるようになる直前の昭和28年(1953)、府中ではおよそ1万軒の家がありましたが、井戸は8千本あったといいます。

ところで、府中市域には、ハケと呼ばれる崖線 が東西に走っています。それを境にした北側は 標高が高いためハケ上、標高の低い南側をハケ 下と呼んでいます。

ハケ上では、水位が低い(深い)井戸が多かったため、汲みあげるのにも、離れた家屋に運ぶのにも特に苦労したといいます。また、井戸の数がハケ下と比較すると少なかったため、一家に1本ではなく共同井戸の場合もありました。

一方、ハケ下は地下水位も高く、さらに湧き水 も豊富だったので、水の入手に苦労することは少 なかったようです。

井戸で水を汲むのには、釣瓶がつかわれました。釣瓶井戸というと、表紙写真のような滑車のついた井戸を思い浮かべますが、水位が高い(浅



浅い井戸に用いられていたはね釣瓶(昭和 29 年 市内 住吉町で撮影)

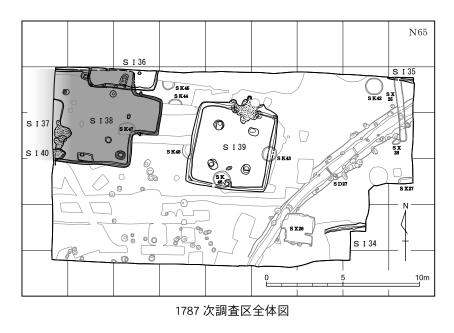
い)八ケ下の井戸を中心に、でこの原理を利用した、「はね釣瓶」と呼ばれる装置もつかわれていました。左下の写真では、井戸枠が写されていないので井戸のように見えませんが、シーソーのような仕組みになっています。片側に縄と桶(釣瓶)がつけられ、反対側の端にはおもりがついています。桶を下すと、反対側のおもりの作用によって桶が跳ね上がってくるため、力の弱い人でも楽に水を汲みあげることができました。

釣瓶をつかった水汲みは、昭和 10 年頃、通称「ガチャポン井戸」と呼ばれる手押しポンプが登場するまで主流でした。しかし、手押しポンプが登場しても、水ガメや風呂桶まで重い水を何度も運ぶ必要があるため、水汲みが大変な仕事であることに変りはありませんでした。

昭和29年になると、府中全域に水道が通じました。それからは、府中の全家庭で楽に水を得ることができるようになりました。ではそれ以降、井戸はつかわれなくなってしまったのでしょうか? そんなことはありません。現在の基準に照らして飲用に適さなくなっていても、農業用や泥落しなどの生活に使用される井戸はまだまだあります。動力による汲みあげが主流ですが、動力なしで使える手押しポンプも一部では現役です。

府中市内の水道水自体も、大木は井戸水です。 市外1か所を含む5つの浄水所(武蔵台・幸町・ 若松町・南町・国立市谷保) から送られていま す。それぞれの浄水所には、水源となる井戸があ ります。そこから汲みあげて殺菌した水に、多摩 川・荒川・利根川などを水源とする水を混ぜたも のが、家々に送られています。しかも、市内水道 水における井戸水の割合は、ほとんどの浄水所 で50%以上と高くなっています(武蔵台のみ約 20%)。災害が起こって水道が止まったとき、緊 急で使用するのも、浄水所で汲みあげられた井戸 水です。府中市の給水拠点である各浄水所は、井 戸そのものと言ってもいいのです。このように、 府中で汲みあげる水は、現在でも人びとにとって 必要不可欠な存在なのです。 (佐藤智敬)

幡町二丁目 府中市ふるさと文化財課 西野善勝



今年の2月に少し変わった形の竪穴建物跡が発見されました。 平面形が凸字形をしているのです。

それは、 八幡町 2 丁目にある武蔵国南八幡宮の北東約 200 m、 旧甲州街道の南約 20 mの地点の発掘で見つかりました。調査地 区の西北で見つかり、全体を発掘できていませんが、竪穴建物の 東壁側に四角い張出部分が設けられていて、凸字形になっている ことがわかります。

竪穴の規模は、南北約 6.2 m、東西 7.6 m以上、深さ 0.64 m でした。市内で発見されている竪穴建物跡としては最大級です。 床面付近からは奈良時代前半に作られた土器が出土しています。 この調査地区では複数の竪穴建物跡が発見されていますが、その 中で最も古い建物と思われます。

凸字形の竪穴建物跡の張出部分は、出入口と推測できます。出 入口を張り出すことで、室内空間を広くしたのでしょう。大きな 出入口であれば、複数人の出入りや大きい荷物の出し入れも容易 になったはずです。室内作業を行う工房などに適した形態の建物 と考えられます。

市内で発見された凸字形の竪穴建物跡は、全部で7棟です。こ のうち2棟は市内北部の武蔵国分寺跡関連遺跡にあります。こ の遺跡は武蔵国分寺の建立や管理に携わった人々の集落でした。 残る5棟は、市中心部に東西に広がる武蔵国府関連遺跡で見つ かっています。 日綱町で2棟、府中町1丁目と八幡町1丁目で 1棟ずつです。これらは武蔵国の行政をつかさどる国府の中心地 域にあります。

今回見つかった八幡町付近は、大型の掘立灌建物跡が発見さ れていることから多磨那家(古代多摩郡の庁舎)が置かれた可能 性のある地域と考えられています。凸字形の竪穴建物跡は、官庁 街的性格を示す八幡町地域の特色ある遺構の一つといってもい いでしょう。



凸字形の竪穴建物跡(南から撮影)







当館天文展示コーナーの「二十三夜塔」 旧所在地:府中市分梅町 江戸時代には仲間内で集まり飲食を共にしながら月の出を待つ風習があった。

▼吹き飛ばされそうなオリオン

振り返れば、煙は次第に濃くなりつつある夜の空に紛れ、オリオンの星座が今にも風に吹き飛ばされそうに、ないでは悪っていた。星影が既に薄水の張った田圃の水に映り、ちらちらと明滅した。

作家・池澤夏樹の父親と言った方が今はわかりやすいかも知れませんが、福永武彦の初期の小説に、青春の鎮逸歌と称された『草の花』(1954年初出、新潮文庫)があります。天逝した熱愛の友を荼毘に付す火葬場の場面、凍てつくような冬の夜空に現れたオリオン座の星々が、強い風で吹き飛ばされそうに瞬いていたと描写されています。主人公の絶望と不安は、たまたま王者オリオンの印象的な姿を眼にしたことで、いっそう痛切に胸に迫ってきたのでしょう。

「雪月花」と謳われたように、日本人は昔から月を愛でたけれど、星にはあまり関心がなかったのではないかとよく言われます。小稿では、日本人にとっての"心に響く星空"がいつ発見されたのか、古典和歌のなかから探ってみることにしましょう。

▼ 万葉集七夕歌への突っ込み

奈良時代末頃に成立した『万葉集』には130余首の七夕に関わる歌が掲載されています。七夕は七月七日に牽牛星と織女星を祀る中国伝来の年中行事ですが、七夕歌には退屈なものが多く、本当に星を見ていたのかと疑いたくなります。大禅家持にも七夕歌があります。初めて「春愁」を詠んだ彼のことですから、しかも儀礼歌ではなく「独り天漢を仰ぎて」と断っている位ですから期待したのですが、実は突っ込みどころがたくさん。

秋風に今か今かと紐解きてうら待ち뤔るに月 傾きぬ (巻20-4311番)

織女が牽牛の訪れを夜更けまで待つというシチュエーションなのでしょうが、少し無理があります。七夕の旧暦七日の月はすぐに傾いてしまうので…。

秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月 をし待たむ (巻20-4312番)

ここでは月の出を待つと詠っていますが、七日の 月はすでに中空に見えているはずです。それに、 「秋草に置く露が美しく飽きないように」とありますが、それを言うなら「天の川の星が美しいように」と詠ってください。七夕歌のすべてに言えることですが、星自体には眼が行っていないようです。

▼ 星々のかなしみ

ようやく平安時代末になると、星空の深い美しさを発見したと告白する女流歌人が現れました。建礼門院を予(平清盛の娘)は、源平合戦で息子の安徳天皇とともに海に身を投げるのですが、自分だけ源氏方に助けられ、余生を京都大原で過ごすことになります。右京大夫自身も恋人・平資盛を遭プ浦で亡くしました。時代の転換期に波乱の生涯を送った彼女は、ある年12月の新月の頃に見た夜空をはつきりと覚えていました。

群雲があわただしく動き、星が見え隠れしていた夕べ。その夜更けにもう一度見上げると、よく晴れた浅葱色の空一面に明るい星々が輝いていました。まるで縹色の紙に箔を散らしたようだと感動します。これまでも星月夜には見慣れていたはずなのに、なぜなの! 思いはいっそう募るばかり…。

月をこそ眺めなれしか星の夜の深きあはれを って知りぬる(『建礼門院右京大夫集』251番)

彼女の歌集には七夕歌 50 余首の絶唱も綴られています。

さまざまに思ひやりつつよそながら眺めかね ぬる星合の空 (同 275番)

何ごとも変はり果てぬる世の中に契りたがは ぬ星合の空 (同 292 番)

眺むれば心もつきて星合の空に満ちぬる我が 思ひかな(同303番)

ここで詠われているのは、"心が折れそうな時にも寄り添ってくれる夜空" "何がおきても変わらず耀いている非情な星" "思いがいっぱいに広がっていると錯覚させてくれる満天の空"です。こうした一見矛盾するような、それでいて切実な星空に対する思いは、その後今日に至るまで(昭和の戦争のときも東日本大震災のときも…)、繰り返し感じられ、詠われてきたことではないでしょうか。

▼ 風と雲と星と

さて、詠い手の境遇とは別のところで、実感のある星空の感動を詠った和歌が登場するのは、さらに遅れて八代集(『古今集』から『新古今集』まで)の時代も過ぎて、鎌倉時代末の『玉葉集』、南北朝時代の『風雅集』あたりだと思われます。『玉葉集』が先の建礼門院右京大夫の「月をこそ…」の一首を再録したのも意味があってのことでしょう。その両集から絶品を一首ずつ選んでみました。

むらむらに雲のわかるる絶え間より 暁 しる き星いでにけり(『玉葉集』藤原為子作、岩波文庫版、 331 頁)

見るままに天霧る星ぞ浮き沈むあかつきやみ の群雲の空(『風雅集』西園寺実兼作、三弥井書店版、 1614番)

風が強く吹く明け方、ところどころに群がった雲が激しく動き、その間から現れてきたひときわ目立つ暁の星(金星か)! 月のない暁の闇、霧がかっていた空が一転、群雲がにわかに動き出し、星々は激しく浮き沈みながら瞬きを始めた!

郷土の森博物館では、今年5月、五藤光学研究所製の世界最新鋭のプラネタリウム機器「ケイロンⅢ」が導入されました。星々の瞬きもリアルに再現されます。夜更けにはオリオン座が上ってくる季節となりました。実際の星空やプラネタリウムで、それぞれに"心に響く星空"を体感していただけたらと思います。



リニューアルした郷土の森博物館プラネタリウム

府中の身近な

昆虫絵巻



② 秋の水辺に竜の目玉

当館園内の水田では、夏の陽光を自一杯浴びた稲が青々と伸び、収穫時期に向けて順調な仕上りを見せています。この時期になると、稲をかすめるトンボの姿が目立つようになります。市内の水田や池でも、水面を横切るスマートな姿を多く見かけます。トンボの英名はドラゴンフライで、約270度の視界を持つ巨大な複説が、不吉な竜に見立てられています。八工やチョウ、他のトンボなどの飛翔昆虫を空中で捕える名人で、6本の脚をかごのように組んで獲物をわしづかみにします。鋭い大顎も発達し、自身の体重分の獲物

でも 30 分程でかじり取り平らげてしまうという、 まさに魔物の如しです。

日本には約200種のトンボが分布すると言われ、大型のオニヤンマから小型のハッチョウトンボやイトトンボまで、様々な種類が知られています。トンボは、卵〜幼虫〜成虫と成長過程で形

態を変える不完全変態の昆虫です。幼虫期はヤゴ と呼ばれ、腹腔弾に鰓に似た器官を持って水中 で呼吸可能な水生昆虫となります。この間には水 中の害虫、成虫期には空中の害虫を捕食するた め、益党として扱われています。特に蚊はボウ フラと成虫の両方が狙われるので、たまったもの ではありません。稲刈りの後、水田に産み付けら れた卵は乾燥に耐え越冬し、翌春に水が張られる と孵化した幼虫が水中で過ごします。水が抜かれ る頃には成虫となり、陸上(空中)に進出するわ けですから、まさに水田環境はトンボの生活環に 見合った場所と言えます。このサイクルに適応す る代表的な種類は赤トンボのグループです。水抜 き後の田や用水路に、尾の端を泥に打って産卵 するアキアカネ・マユタテアカネ・ミヤマアカネ、 稲の上に空中からパラパラ卵を落とすナツアカ

ネ・ノシメトンボがポピュラーでしょう。

こうした止水域の種類とは別に、河川などの流水域に棲む種類もいます。府中では特に多摩川が最大の生息地となっています。川には流れの緩い所や河川敷に出来た水溜りもあるため、止水域の種類も見られます。多摩川とともに四谷方面に残る水田地帯も、絶好の生育場所でしょう。

さて、近年水質が浄化された多摩川では、かつて市内に生息していた種が復活しています。ひとつはサナエトンボ類で、1983年以降姿を消していましたが、1996年に是政付近の多摩川にオナガサナエの羽化殻が発見されてから、ホンサナエ・ミヤマサナエ・オジロサナエ・コオニヤンマ・ダビドサナエと続くようになりました。これらは過去にほとんど見られなかった種類であり、上流からヤゴが流されて来たものと推測されます。また、一時期までは見られなかったハグロトンボも1993年以降連続して出現しています。多摩川本

流沿いの流れが速い浅瀬になっている国立排水樋門や、四谷の用水路沿いに多く生息しているようですが、さらにこの場所では、懐かしのギンヤンマも頻繁に姿を現すようになりました。

1980年代に入った頃、都市環境に暮らす多くの生物を対象に、人工生態系(ビオトープ)を整える試みが

各地で進みましたが、トンボを主に看板を掲げる 件数が目立ちました。成虫の寿命が長く、飛翔力 が強いことで、十分に空間の開けた場所なら光坪 程度の面積でも、水草があれば産卵が期待できた からです。水草の繁茂過多などに注意すれば、一 度発生したトンボは毎年回帰する確率も高く、環 境保護活動には大変有効な生物と考えられます。 水質が改善された多摩川にサナエトンボが戻っ て来たことも然り、周囲の環境に敏感に反応して 現れるトンボは、ある意味環境指標となる貴重 な存在だと思います。また、発達した2対の翅を 交互にはばたかせ、害虫を捕獲しながら決して後 退することのない行動を崇め、古くは武士の時代 に彼らを不退転の精神を現す「勝ち虫」と言った そうです。日本では魔物の竜ではなく、今も昔も (竜)神様なのかも知れませんね。 (中村武史)



企画展展示会案内

ちょっとむかしのくらし ~その3~

11/10 (土) ~ 3/17 (日)

会場:本館2階企画展示室



ローラー式洗濯機

明治以降、それまで衣服の主流だった和服から、徐々に洋服が広まっていきます。やがて、洗濯も大きくかわります。衣服は手で洗うものでしたが、そこに電機洗濯機が登場するのです。

日本ではじめて国産の電機洗濯機が発売され たのは昭和5年(1930)ですが、高価すぎるこ とと、手もみ洗いが主婦のたしなみとされていた 時代背景から、すぐに普及はしませんでした。昭 和 20 年代後半になると、電気洗濯機が安価に なりはじめます。そして、経済復興がめざまし く、「もはや戦後ではない」とされた昭和31年 頃、神武景気と呼ばれる好景気で日本のくらしは 大きく変化していきます。その頃、景気の象徴と してもてはやされたのが、「三種の神器」と呼ば れた、白黒テレビ、電気冷蔵庫、そして電気洗濯 機でした。好景気かつ、さまざまな会社が改良・ 開発を続けて価格が下がったことも手伝い、あこ がれの三つの家電を購入できる家庭は増えてい き、電気洗濯機も一家に一台備えられるように なっていきます。

上のイラストは、そうした時期に製造された 洗濯機のひとつで、昭和 32 年に日立製作所から 発売されたものがモデルです。衣類を洗濯した 後、手回しのローラーでしぼれるようになってい ます。その際に服についたボタンが壊れる、ロー ラーのハンドルがすぐ調子が悪くなるといった こともあったようですが、こうした電気洗濯機の 登場は、日々のくらしの革命と言ってもよいもの でした。長時間にわたる手洗いの労働から解放されることにつながったからです。

さらに、脱水も簡単に行えるよう、洗濯槽と脱水槽のふたつを併せ持つ二槽式洗濯機が、昭和35年にはじめて発売され、普及していきます。二槽式洗濯機は、昭和40~50年代の電気洗濯機の主力になりました。現在では一槽で洗濯から脱水どころか乾燥までしてくれる全自動洗濯機が登場しています。二槽式洗濯機はたくさんの洗濯物に対応できるため、わずかながらも販売されていますが、ローラーを備えた洗濯機はもはや実用ではなく、博物館か古道具店にしか残っていないかもしれません。

平成も30年となりました。ですが、こうした 洗濯機が普及してからは、100年たっていません。そんな短期間でも、人びとのくらしは激変し、くらしの道具類も変化し続けています。ゆえに、私たちが「ちょっとむかし」と考えてしまう数十年前のくらしでさえ、なつかしい、と思える人と、まったく知らずにかえって新鮮に感じる人がいます。

そこで今回も、ちょっとむかしにつかわれてきた生活に関する道具類の変遷やつかい方を、収蔵資料を通して振り返っていきます。ここで紹介した洗濯機も、もちろん展示予定です。また、今回は定番の展示にあわせて、ちょっとむかしの遊びをテーマにしたミニコーナーも計画していますので、あわせてお楽しみください。 (佐藤智敬)

史料に見る府中の事件簿

②蚕日待で狐付き



「史料に見る府中の事件簿」の2回目は、天保 12年(1841)に本宿村(現 西南町)で起こった、「狐付き」騒動をご紹介します。何やら怪しげな事件名ですが、まずは史料をもとに事件のあらましを紐解いてみましょう。

狐が付いたのは本宿村の百姓・七郎兵衛の女房とめ。付いた場所は、同じ村の市三郎宅です。 天保12年3月5日、そこでは養蚕に携わる人々が集まって蚕鞴をおまつりし、日の出を待つ蚕百

その夜、参加者のひとりだったとめは、飲酒による体調不良で、夜明けを待たずに帰宅しました。その後、言動に異常が生じ、狐が付いたような状態になったため、七郎兵衛は蚕日待で釜踊りが行われたのではないかという疑念を抱きます。彼は他の参加者にその有無を確かめますが、取り合ってもらえなかったため、計12人を相手取り、代官所への「駆込訴」を決行しました。「駆込訴」とは、通常の手続きを終れい越訴のひとつで、この際七郎兵衛は、名業立の承諾を得ずに訴訟に踏み切ったものと思われます。

突然の出来事に本宿村の関係者たちは、さぞ 驚いたことでしょう。しかし訴状が出されたからには、対処しないわけにはいきません。仲裁 人が間に入り七郎兵衛と交渉した結果、代官所 の取調べが始まる前の4月17日に示談が成立。 その後、代官所へ訴訟取下げ願いを提出し、一 応の決着をみたようです。

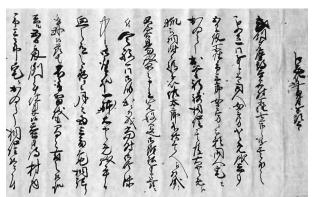
これが「狐付き」騒動の大まかな流れですが、この事件でもっとも不可解なのは、蚕日待と釜踊り、そして狐の関係です。釜踊りは「お釜祈祷」とも記されていますので、信仰に関わるものだと考えられますが、その詳細は全く分かりません。本宿村小野宮(現 住吉町)の内藤治右衛門の日記には、この件について「七郎兵衛女房、御釜踊中座二立、狐附候苗」と、釜踊りを途中退席したために狐が付いた、と受け取れるような記載があります。もしや釜踊りとは

狐を崇める、ないしは調従する呪法で、中座の報いで狐が付いたのでは…、などとあれこれ推測を巡らしてみましたが、答えには至りません。蚕日待との関連も推し量ることができず、思考は袋小路に入ってしまいました。

更にもうひとつ、なぜ七郎兵衛は、釜踊りの有無をめぐって「駆込訴」という強硬手段に訴えたのか、という疑問も生じます。七郎兵衛の言によると、偶々立ち寄った行脚体の僧に事情を話したところ駆込訴を勧められ、教えられるがままに訴状を持って江戸に出たというのですが、何とも不可思議な話です。訴状はその僧が認めたので、無筆の七郎兵衛は内容を知らないとも言っており、まるで旅の僧に操られ事に及んだような論法になっているのです。

そして示談の結果、この一件の結論は、すべてが七郎兵衛の勘違いで、釜踊りは行われていないということになりました。とめの異常も、釜踊りがないなら狐も付かないということか、持病の「血之道之病」が飲酒により悪化したものだとされています。これで七郎兵衛は納得したのかと疑問に思いますが、訴えられた人々の対応にも問題があったと明記されており、彼への配慮も見受けられます。また、示談が成立するころにはとめったがよれたのかもしれません。

さて、このように幕引きが図られた「狐付き」 騒動ですが、火のないところに煙は立たぬともいいます。とめの様子を目にして、すぐに釜踊りを疑った七郎兵衛の様子から、その頃本宿村では何度かそれが行われていたことがうかがえます。そうすると、実はこの日も…と疑ってみたくなりますが、いささか怪しげな民間信仰にまつわるこの事件、真相は神のみぞ知るということでしょうか。 (花木知子)



「狐付一件二付訴訟取下ヶ願」部分 当館寄託 新宿菊池家文書